研究テーマ 看護・介護職種における終末期カンファレンスと終末期ケア態度との関連

病 院 名 医療法人社団健育会 熱川温泉病院

演 者 ○丸石寛奈(看護師) 石田みな子(看護師) 本山命(看護師)
星指菜摘(看護師)

概 要

【研究背景】

近年、緩和ケアの現場においてグリーフケアの重要性が認識され1)、患者・遺族に対するグリーフケアに関する先行研究は多くある。デスカンファレンスがグリーフケアに繋がる2)。一方、デスカンファレンス後に自分のケアを責めてしまうという意見もある2)。日々カンファレンスを行う事で、デスカンファレンスの時点で感じる心残りが軽くなるのではないかと3)と考え、終末期からカンファレンスを行う事で、医療者のグリーフの軽減に繋がるのではと考えた。

【研究目的】

療養病棟で、終末期カンファレンスを行い、患者の死後も肯定的な感情が生まれ、医療者のグリーフが軽減するのかを調査する。

【研究方法】

1. 対象：療養病棟勤務する看護職・介護職計79名 うち同意が得られたのが40名 有効回答が33名 2. 期間：令和2年7月～9月 3. 手順方法：ジョンセンの臨床倫理4分割法をもとに手順書作成 4. 調査内容1) 属性：職種、経験年数、勤務形態、経験病棟・年数、近親者との死別、看取り経験の有無 2) 患者との死別後の看護師の悲嘆尺度：18項目を5段階で評価 介入前後で実施 5. 分析方法：対応のあるt検定にて有意水準 <0.05 とした

【結果】

終末期開催件数4件、参加人数29名（看護・介護職）4項目目の「もっと患者さんを楽しませてあげられたのではないかと思った」は介入前に比べ介入後のほうが悲嘆が低かった。

【考察】

終末期カンファレンス実施後、患者の残された時間を意識出来、最善のケアを実施する事で患者の死後、肯定的な感情が生まれたと考える。カンファレンスで情報共有をし、互いを認め合う事で安心感が得られまた、看護・ケアを患者・家族へ実施する事で、患者の死後やり切った達成感・満足感が生まれ悲嘆の感情が軽減したと考える。他の項目に有意差が見られなかった背景として、終末期カンファレンスの開催件数が少なかったこと、参加人数が少なかったためだと考える。

【結論】

終末期カンファレンスを行い、医療従事者間で必要な看護・終末期に対する思いを話し合うことで、患者が死後にネガティブな感情が軽減し、グリーフの緩和に繋がる事が示唆された。

【引用参考文献】

- 1) 米虫圭子-他：ホスピスケア病棟に従事する看護師にとってのグリーフケア提供の意義とその影響-2009年
- 2) 堀美佳-他：A病棟でのデスカンファレンスの効果と終末期看護の今後の課題-2010年
- 3) 広瀬寛子：明日の看護に生かすデスカンファレンス-2010年